

コンピュータ文における主題導入機能

一名詞句の指示性の観点からの分析一

ニームチャラーン・ニーラチャー

1. はじめに

新しい要素を談話に導入する際には、特定の言語形式が好んで選択される (Du Bois 2003)。特に談話において重要性がある要素を導入する際、「コンピュータ文」が頻繁に選択される (ニームチャラーン 2021)。コンピュータ文とは主語名詞句と述語名詞句を「だ」「である」という「繫辞」(コンピュータ) で結びつける文 (西山 2003 : 119) を指し、「〈主語名詞句〉は／が〈述語名詞句〉だ」の形をもつ。コンピュータ文は、ある要素を表す対象を探して別の要素で指定する「指定文」((1)―②) と、ある要素の属性・性質を述べる「措定文」((1)―③) に大きく分けられる。

- (1) ①天王星はなぜ軌道を外れて動いているのか。②その疑問を解決したのは、第二の技術革新である「天体力学」であった。③天体力学は、イギリスの科学者、ニュートンの提唱した「万有引力の法則」に基づいて、太陽系にある惑星相互の重力の関係を考える理論である。④観察記録の積み重ねをもとにしつつ、力学の理論から、計算で惑星の位置や軌道を求めるのである。 (渡部潤一「冥王星が「準惑星」になったわけ」三省堂)¹

指定文は新しい談話主題を導入する機能をもつとされる。談話主題とは談話のある部分で言及されていることを表す要素であり、何節にもわたって出現することから判断できる (詳しくは 3.3 節で後述する)。(1) に出現した「天体力学」は何節にもわたって語り継がれているため、この部分の談話主題とみなす。この例のように、談話主題を導入する際に指定文が用いられる。しかし、指定文であっても主題を導入する機能をもたない場合がある。この主題導入機能をもつ・もたない指定文の特徴に関する検討は不十分である。また、他の文

¹ 用例における下線部は該当文を、「／」は原文における段落の切れ目を表す。

と異なり、指定文がこの機能をもつ原因も明らかになっていない。本研究ではこれらの点の解明を目的とする。ただし、後者の課題の解明には、他の文との相違点を探る必要がある。このため、本研究では別の種類のコンピュータ文である措定文を取り上げ、指定文と比較する。

指定文と措定文における文の意味は主語名詞句（以下、A項）と述語名詞句（以下、B項）の意味的關係から生じる。これらの文の名詞句に関する違いは主題展開に関する違いにつながると考えられる。このため、両者を比較する際には名詞句の指示性という意味論的概念を採用する。本研究では、まず指定文における主題導入機能を名詞句の指示性の観点で分析する。次に、措定文における主題展開の機能を同じ観点で分析する。最後に、これらの文の相違点を探り、指定文が主題導入機能をもつ原因を考察する。

2. 先行研究と問題点

指定文の談話機能について論じた代表的な研究は砂川（2005）である。砂川（2005）は指定文を「同定文」と呼んでいる²。この同定文は①「新しい主題の導入」、②「古びた主題の再活性化」、③「状況的枠組みの提示」、④「談話の結び」という機能をもつと述べている。また、助詞「は」「が」の使用と前提・焦点という情報構造の観点から同定文を、《後項焦点文「～は～だ」》、《前項焦点文「～が～だ」》、《全体焦点文「～が～だ」》という3つの種類に分類している。助詞や前提・焦点の位置の違いによって相違点が見られるが、同定文は基本的には上記の4つの機能をもつと指摘している。また、栗原（2007）は、指定文は要素を後続文に提示する機能を担うが、要素の意味範疇により後続の仕方が異なると述べている。

以上の研究は分裂文「Aのは／のがBだ」をコンピュータ文の一種として分析を行ったが、分裂文のみに着目してその談話機能を分析した研究も存在する。分裂文の主な機能は話題を導入すること（伊藤2010）、助詞「が」を伴う場合は焦点の位置の違いによって談話機能が異なること（加藤2009）などが指摘されている。これらの点は非分裂文であるコンピュータ文の場合でも同様である。

² 砂川（2005）はコンピュータ文を「記述文」と「同定文」に分類し、それらは「措定文」と「指定文」に相当する。ただし、同定文には注4のような同一性文も含まれる。

このため、本研究は分裂文をコンピュータ文の一種と捉えて区別せずに分析する。また、従来の研究は説明文、小説、新聞記事など様々なジャンルの文章を調査し、いずれも指定文による主題導入の用法が見られる。このため、指定文における主題導入機能は一般化できると思われる。

しかし、この主題導入機能に関する分析は不十分である。従来の分析対象は指定文に限定されているため、指定文がこの機能をもつ理由は説明できていない。主題導入機能は存在文にも見られる(砂川 1995a、ニアムチャラーン 2023)が、この機能の仕組みについては解明されていない。この機能をもつ理由を解明することで主題導入機能の仕組みが把握できると予測する。主題導入として用いられない別の文と比較することは、その理由を知るための方法の一つである。そのため、本研究は指定文と措定文を比較し、その理由を探る。

また、従来の研究は主に助詞の使用や焦点の位置の違いを見て、指定文における談話機能を分析している。これらは指定文間の違いを説明する際に利用可能である。しかし、指定文以外の文も含めたより広範囲の分析の際には利用不可能となる。1節に現れた(1)を見ると、指定文と措定文はいずれも助詞「は」を伴い、かつ、いずれも主語名詞句 A 項が前提、述語名詞句 B 項が焦点である。つまり、助詞の使用と焦点・前提の位置が同じである。このため、別の観点で指定文と措定文の相違点を調べる必要がある。本研究は指示性・非指示性という名詞句の意味論的観点を採用するが、詳しくは3.2節で説明する。

3. 本研究で用いる諸概念について

分析の前に、本研究が主に用いる概念を整理する。3.1節では措定文と指定文の規定を説明する。3.2節では名詞句の指示性の概念を説明する。3.3節では本研究で扱う談話主題と主題導入の用法を説明する。

3.1 措定文・指定文の規定

日本語のコピュラ文は様々な観点から分類されているが、基本的には「措定」と「指定」の用法があると知られている。「措定」と「指定」の区別は最初に三上(1953)によって提唱されている。上林(1988)はこの区別を継承し、助詞の使用と名詞句の意味的な関係を検討した上で「措定」と「指定」を以下のように規定している。

(2) 指定：「AはBだ」

「A」という表現で指示される指示対象についていえば、それは“B”という性質をもつ。

倒置指定：「AはBだ」（指定：「BがAだ」）

「A」という表現で指示される指示対象、あるいは“A”という性質を持つものをさがせば、それは「B」という表現の指示対象である。（指定はA、BをそれぞれB、Aでおきかえたもの）（上林 1988:71）³

(2) のように、上林（1988）は指定と指定の用法における名詞句を、それぞれ「Aについていえば、それはBという性質をもつ」「Aをさがせば、それはBだ」という意味関係をもつとしている。また、助詞の使用と名詞句の出現位置の違いにより指定の用法を「指定」・「倒置指定」に分類している。本研究は上林（1988）の意味関係に基づくが、これらを区別せず「指定」として扱う。指定文を「は」を伴う場合と「が」を伴う場合に分類する。「が」を伴う場合は、AとBの対象の位置の入れ替えが可能である。

また、上林（1988）はAの対象とBの対象が同一である場合（つまり、A=B）を指定文の一種としている⁴。しかし、指定文あるいは指定文に属するかについては議論の余地があるため、本研究はこの種類を分析対象としない。

3.2 名詞句の指示性

前述のように、本研究ではコピュラ文における名詞句の指示性を見て、主観展開に関する機能を分析する。ここで扱う名詞句の指示性の概念は西山（2003、2007）の概念である。西山（2007）は「（具体的対象であれ抽象的对象であれ）世界の中の対象を指示するために用いられている（p.5）」名詞句を指示的としている。一方、「世界の対象を指示する目的で用いられていない（p.6）」場合は非指示的としている。これに基づき、指定文と指定文における名詞句は、以下のような指示性をもつ。

(3) a. 指定文 A = 指示的名詞句、B = 非指示的名詞句（叙述名詞句）

例) 五嶋みどりはヴァイオリニストだ。

³ 説明の都合上、（倒置）指定文の説明の順番とA・Bの出現を修正した。

⁴ これは西山（2003）でいう「（倒置）同一性文」である。「ジキル博士はハイド氏だ」のように、A項とB項は共に指示的名詞句である。

- b. 指定文 A = 非指示的名詞句 (変項名詞句)、B = 指示的名詞句、非指示的名詞句 (変項名詞句)

例) 花子殺しの犯人はあの男だ。
 = あの男が花子殺しの犯人だ。

(例文は西山 2003 より)

まず、(3a)と(3b)における例の実線部は特定の対象を指すため、指示的名詞句となる。一方、それぞれの例における波線部は非指示的名詞句である。(3a)の「ヴァイオリニスト」は「五嶋みどり」という人物の属性を表すために用いられる。このような属性を述べる名詞句は「叙述名詞句」と呼ばれる。また、(3b)の指定文は「花子殺しの犯人」は一体誰かと探せば、ああ分かった、あの男がそうだ(西山 2003:132)」という意味である。A 項「花子殺しの犯人」は、すなわち「x が花子殺しの犯人である」のように解釈でき、充足されていない変項 x をもつ名詞句である。このような変項 x が含まれる命題関数を表す名詞句は「変項名詞句」と呼ばれる。そして、B 項として現れた「あの男」はその変項 x を満たす値である。つまり、(3b)は(4)のような意味構造をもつ。

(4) [x が花子殺しの犯人である] における変項 x を埋める値は「あの男」だ。

値である要素は基本的に指示的名詞句であるが、変項名詞句の場合もある(用例は 5.1.1 節の(9)を参照)。また、(3b)は「あの男が花子殺しの犯人である」に言い換えられ、この場合は変項名詞句と値の位置が入れ替わる。

ところが、西山(2003、2007)は、「変項名詞句」を有するコピュラ文は上記の(3b)のように助詞「は」と「が」の言い換えが可能な指定文に限定している。助詞「が」を伴う場合、A 項には変項名詞句が出現できないとし、(5)のような例の A 項を変項名詞句とみなさない⁵。しかし、A 項は「x が特におすすめのモノである」のように解釈でき、B 項「このメニュー」がその変項 x を埋める値として捉えられる。このため、この場合も A 項と B 項が変項名詞句・値の関係をもつと考え、本研究での指定文はいずれも変項名詞句と値を有するとする。

(5) 特におすすめなのがこのメニューです。(例文は西山 2003 より)

名詞句の指示性は最初に上林(1988)がコピュラ文を分類するために使用し

⁵ この場合は「提示文」と呼ばれる。詳しくは西山(2003)や熊本(2000)を参照されたい。

た概念である。西山（2003、2007）はこの概念を詳細に分析し、他の文の分析にも採用している。談話研究においては、存在文における主題導入の仕方が名詞句の指示性によって異なると指摘されている（ニアムチャラーン 2023）。コンピュータ文における主題導入機能との関係については本研究で検討する。

3.3 談話主題と主題導入の用法

本節では、本研究で扱う談話主題の概念や、主題導入の用法の有無に関する判断について説明する。

まず、談話主題の概念の説明から始める。談話主題（discourse topic）は、ある談話において「何について語っているか」という問いに対する回答を指す（砂川 2005、Brown & Yule 1983）。談話全体の主題と部分的な主題があるが、本研究で扱われる主題は後者の部分的な主題を指す。

談話主題を客観的に認定する方法として、要素の繰り返しや同一指示表現の再出現からの判断が使用できる（Givón 1983、Todd 2016）。どの程度の出現数から主題として捉えられるかは議論の余地がある。しかし、主題となる要素は言及された後すぐには消えない。つまり、継続性があることが談話主題を決める重要な点である。そのため、本研究では「格を問わず、ある部分で2節以上言及されている要素」を談話主題とみなす。1節で示したように、(1)の「天体力学」はこの規定に従っているため、談話主題と捉えられる。ただし、ある部分にはより大きい主題（Major Topic）とより小さい主題（Minor Topic）が出現することもあり（Van Dijk 1977）、これらは同時に展開することができる。

以上の規定に従う談話主題を導入する際に用いられる文は「主題導入」の用法をもつとする。すなわち、主題導入としての用法がある文は、以下の2つの条件を満たすものである。

(6) 主題導入の用法をもつと判断する条件

- a. 該当文に初出の要素、あるいは、しばらく言及されていない既出の要素が出現する。
- b. 導入された要素（または、その一部）の反復語や同一指示表現が後続文に出現する。

(6a)の条件は、初出の要素の導入だけではなく、既出の要素の再導入も含む。いずれも特定の要素をその部分で活性化させて主題として後続させる点が同様である。このため、ここでは同じものとして扱う。また、(6b)の条件にあ

る「同一指示表現」は砂川（1995b）の広義の同一指示表現を指す。つまり、同義語・省略語・代名詞のほかに、詳述の場合、同じ対象を別の表現でパラフレーズする場合、同じ対象を指すが解釈が必要な場合も含む。

4. 分析対象と方法について

本研究は中学校の教科書に掲載された説明的文章（30テキスト）を調査対象とし、これらのテキストから指注文「AはBだ」と指定文「Aは(が)Bだ」を抽出した⁶。他の要因が機能の分析に影響することを避けるため、文末にモダリティ表現（「のだ」「かもしれない」「と思う」など）が現れたもの、従属節（「～ば」「～ても」など）や連体修飾節の中に現れたもの、否定的・疑問的な意味をもつもの、会話の文に現れたものは分析対象としない。分析対象となった指注文が108例、指定文が119例あった。5節では名詞句の指示性の観点で指定文における談話機能、特に主題導入に関する機能に着目して分析する。6節では指注文における主題展開に関する機能を分析する。7節では5～6節の分析結果を踏まえ、指定文と指注文の間の相違点を見る。そして、名詞句の指示性はどのようにそれぞれの文の機能に影響するかを分析する。これをもって指定文が主題導入機能をもつ原因について検討する。

5. 指定文における談話機能

3.1節で説明したように、指定文は「Aをさがせば、それはBだ」という意味をもつ。これはA項がB項によって指定されるということであり、指定文におけるA項とB項は指定される・指定するという関係がある。(7)のA項は指定される方で、B項は指定する方である。(7)の通り、指定される方が変項名詞句（波線で示す）、指定する方がその値（□で示す）に相当する。

(7) 機械時計の出現が人々の暮らしや労働に与えた最も大きな影響は、不定時法から定時法への転換である。

（角山栄「シンデレラの時計」光村図書）

(7) [xが機械時計の出現が人々の暮らしや労働に与えた最も大きな影響である]における変項xを埋める値は不定時法から定時法への転換である。

⁶ この「だ」は「です」「である」「だった」の場合や省略の場合も含む。

119例の中の75例が主題導入として用いられている。「は」を伴う指定文と「が」を伴う指定文がどの程度主題導入の用法をもつかについて表1で示す。

表1 指定文の主題導入とそれ以外の用法の用例数

助詞	主題導入	主題導入以外	合計
「は」	64 (68%)	30 (32%)	94 (100%)
「が」	11 (44%)	14 (56%)	25 (100%)

表1を見ると、「は」の場合は大差が見られるが、「が」の場合はあまり差がなかった。これにより、前者は主題導入として用いられる傾向があるが、後者はそうではないと解釈可能である。しかし、助詞の区別で主題導入機能を見るのは不十分である。この点は5.2節で後述する。以下、それぞれの場合を分析する。

5.1 主題導入の用法をもつ指定文

5.1.1 助詞「は」を伴う場合

表1で見たように、「は」を伴う場合では主題導入として用いられる例が約68%を占めている。具体的な例は、(8)の通りである。

- (8) 次のページに掲げるのは引き札というものだ。引き札とは、今でいう宣伝ちらしである。版画は大量生産が可能のために、大きな商店は早くから宣伝媒体として浮世絵を利用していた。この図は、大阪の薬種問屋が江戸に支店を設けたことを知らせる引き札である。

(高橋克彦「江戸の人々と浮世絵」光村図書)

この例は「次のページに掲げるのは何か」というと、それは引き札というものである」ということを述べている。A項「次のページに掲げるの」が変項名詞句を、B項「引き札というもの」がその値を表す。「引き札」の反復語が出現するため、この要素がこの部分の談話主題と捉えられる。「は」を伴う場合はこのように、値として導入された要素が主題として後続するのである。

値の多くは(8)の「引き札」と同様に指示的名詞句である。しかし、以下の(9)のように、値が変項名詞句の場合も見られる。

- (9) このように、過去にも絶滅は起きていることを考えると、現代の絶滅がどうして問題なのだろうか。/現代の絶滅と過去の絶滅の大きな違いは、そのスピードと原因である。/過去に起こった絶滅は、かなりゆっくり

りしたスピードだったと考えられている。恐竜の絶滅が起こった時代でも、千年に一種くらいのスピードだったと考えられているのである。(3文略) / また、過去の大量絶滅を引き起こした原因は、火山の大噴火、隕石の衝突、あるいは、それらによって太陽の光が遮られたり海の酸素がなくなったりするという環境変化であった。

(中静透「絶滅の意味」東京書籍)

(9)の値として出現したB項は「現代の絶滅と過去の絶滅のスピードと原因は何か」という疑問を表す名詞句として解釈できる。このため、変項xを有する名詞句と捉えられる。よってA項は「変項名詞句を値としてもつ変項名詞句」であり、このような変項名詞句は「2階の変項名詞句」(峯島2013)と呼ばれる。変項名詞句である値は、(9)のように、詳述の形で後続する。

また、助詞「は」は通常既出の要素、あるいは、読み手が先行文脈から推論できる要素と共に用いられる。このため、変項名詞句の多くは(9)のように先行文脈から引き継いだ内容を表す。しかし、上記の(8)のように、変項名詞句では直接に先行文脈と関連しない表現も用いられる(13例)。他には、「ここで注目すべき点は」「まず考えられることは」「興味深いのは」などがある。

さらに、(10)のように、変項名詞句の部分では「一つ」「二つ」という列挙を表す表現が用いられる場合も見られる(10例)。

(10) そこには、二つのきっかけがあった。 / 一つは、一九八五年の新婚旅行中に、ハワイの義肢製作所で、アメリカの最先端の足部を見せてもらったことである。足部でだいじなのは、「キール」とよばれる芯の部分だ。当時のキールは、プラスチック製で足形に作ってあるものが多かった。しかし、そこで見たキールは、薄いカーボンファイバーを何層も重ね、湾曲させた黒い板だった。(1文略) / もう一つは、千葉県の医師がアメリカから持ち帰ったビデオだった。大腿義足の若い女性が、グラウンドで走っている。義足にしては滑らかな走りだ。この映像も衝撃的だった。
(佐藤次郎「風を受けて走れ」東京書籍)

以上より、主題導入として用いられる「は」を伴う指定文には、変項名詞句と値が様々な形式として出現する。しかし、変項名詞句が先に出現する点と、値である要素が新たな主題として後続する点が同様である。

5.1.2 助詞「が」を伴う場合

「が」を伴う指定文は「変項名詞句—値」と「値—変項名詞句」という2つの順序で出現する。それぞれの用例は(11)と(12)の通りである。

(11) 何かスズメの数の変化を示す記録はないのでしょうか。／探してみても、ようやく見つけ出したのが、東京都東久留米市自由学園における鳥類の調査記録です。これは四十数年にわたって、この学園の生徒さんが、毎月、同じ道順を歩いて、そこで見られたスズメを数えたものです。

(三上修「スズメは本当に減っているか」東京書籍)

(12) ところが、二十数年前に、フランスの南部で、これ以上の壁画が見つかった。ラスコー洞窟の壁画が、それである。これも、ほとんど野生の動物たち、すなわち彼らの狩猟の対象を描いたものである。

(中谷宇吉郎「ラスコー洞窟の壁画」光村図書)

(11)と(12)のような順序で表す用例は、それぞれ8例、3例見られる。これらは変項名詞句と値の位置が異なるが、値として出現した要素が主題として後続する点が共通している。この点は前節の「は」を伴う場合と同様である。

また、「が」を伴う指定文における変項名詞句は全て先行文脈から引き継いだ内容を表す。そして、値には指示的名詞句のみが出現する。「は」を伴う場合と比べて「が」を伴う場合の方が出現可能な要素が限定されると従来の研究にも指摘されている(砂川 2005、栗原 2007)。本研究の調査では「が」を伴う場合は変項名詞句と値の使用に関連する制限もあるとわかった。

以上、主題導入として用いられる「は」・「が」を伴う指定文では、変項名詞句と値がどのように出現するかを説明した。特に注目すべきなのは、いずれも多くの場合に変項名詞句が先行内容を引き継ぎ、より新しい要素が値として出現する点である。これは主題導入として用いられる指定文の特徴の一つだと考えられる。これについては次の5.2節で論じる。

5.2 主題導入以外の用法をもつ指定文

議論の都合上、「が」を伴う場合を先に説明する。表1で見たように「が」を伴う場合は主題導入の用法とそれ以外の用法の用例数が同程度である。後者の方は、(13)と(14)のような場合である。

(13) 全国に展開する新聞と被災地の地元紙では、読者が新聞に望むものが異なる。津波で被災し、助けを求める人々がそのときに必要としている情

報を継続して発信し続ける。それが地元紙の役割だ。／言葉の使い方も微妙な違いが出る。

(今野俊宏「いつものように新聞が届いた」東京書籍)

(13)は全国紙と地方紙が東日本大震災の際に掲載した内容の違いについて説明している。該当文が用いられた後に内容の違いに関する話が終わり、言葉の違いという別の話に移っている。これは主題を締めくくるために用いられ、砂川(2005)の「談話の結び」に当てはまる。このような場合は6例見られ、値である要素がいずれも「それ」「これ」の指示語として出現する。もう一つの用法は(14)の通りである。

(14)これに対して、絶滅してもかまわない生物もいるのではないかと主張する人もいる。絶滅しても生態系に大きな影響を及ぼしそうにもない生物や、人間におよそ恩恵をもたらさそうにもない生物もいる、というのがその根拠だ。／だが実際には、ある生物の絶滅が生態系にどれくらいの影響を与えるかを推し量ることは、容易ではない。

(中静透「絶滅の意味」東京書籍)

(14)では値の一部の要素が後続するが、この値が先行文脈の話を引き継いだ内容である。この場合は3例見られ、値はA項として出現する。加藤(2009)は、(14)のようなB項はA項と先行文脈との関係を示すために用いられると述べている。すなわち、この場合の変項名詞句は単に値と先行文脈を結びつけるために用いられるのである。「は」を伴う場合においても(13)(14)と似た用法が観察される(3例)。この場合、(15)のようにB項が値を取り、値が変項名詞句と先行文脈との関係を示すために用いられる。

(15)大腿義足を使っている者が何より恐れるのは、この「膝折れ」による転倒である。転べば大けがにつながることもある。病院でもリハビリの場でも「走る」という発想が出てこなかったのは、そのためだ。／脚の切断した部分は傷つきやすく、最初は歩く訓練をするだけでも出血する。

(佐藤次郎「風を受けて走れ」東京書籍)

また、「は」を伴う指定文には以下の(16)のように、値が直前の文脈に現れた既出の要素を示す場合もある(3例)。この場合は要素を際立たせるために用いられると考えられる。

(16)こうして、本・友達・自分の三者の間で、「文殊の知恵」を生み出す作業を始めることができるのである。いま必要とされているのは、この「文

殊の知恵』である。(1 文略) 事の道理や筋道をわきまえ、正しく判断するために、「文殊の知恵」を生み出す力が必要とされる時代を迎えているのである。(北川達夫「文殊の知恵」の時代」三省堂)

以上の(13)～(16)は助詞の使用と変項名詞句・値の位置に関する違いがある一方で、値が先行文脈から引き継いだ要素である点は共通している。これは主題導入の場合と異なり、値の新規性が低い。この新規性は談話の世界における新規性を指す。新規性が低いというのは、その要素がすでに談話に出現した、あるいは、先行文脈から推論できるという意味である。値の新規性が低いと、(13)～(16)のように主題導入以外の機能を担うことになる。本調査に現れた「が」を伴う指定文は、値の新規性が高い用例は全て主題導入の用法をもつものに対し、値の新規性が低い用例は全て別の機能を担っている。助詞「は」を伴う場合にも、値の新規性が低い用例は主題導入以外の用法をもつと見られる。このように、指定文の機能の分析には助詞の使用を見るのには不十分であり、変項名詞句・値の使用とその新規性にも目を向ける必要がある。

ところが、「は」を伴う場合には値の新規性が高くても後続しない場合が見られる。それは(17)のように値が数量を表す場合である(13例)。この場合はA項、あるいは、先行文脈における要素が後続文で語り継がれる。このため、値の意味範疇はその文の主題導入としての用法に影響するとわかる。

(17) そのとき、薬も必要だが、もっと必要なのは、きれいな水を手に入れるための井戸だと聞かされた。当時のギニアの平均寿命は、四十六歳。安全な水が手に入らず、風土病で命を落とす人は少なくなかった。

(坂本達「恩返し井戸を掘る」東京書籍)

以上、主題導入以外の用法をもつ指定文について分析した。結果として、以下のように、主題導入として用いられる指定文の特徴が明らかになった。

- ① 値である要素が変項名詞句より高い新規性を持たなければならない。
- ② 値である要素の意味範疇は文の主題導入機能の有無に影響する。

変項名詞句と値はそれぞれ「不明瞭な表現」「より明瞭な表現」としての性質をもつと捉えられる。不明瞭な表現を使用して要素を導入する場合、その不明瞭な表現を先に用いてから、より明瞭な表現を用いるという流れが自然な流れである。このため主題導入の用法をもつ指定文は①の特徴をもつのである。②については、値の意味範疇によって措定文に似た意味や機能をもつことになると考えられるが、詳しくは次節で後述する。

6. 措定文における主題展開機能

指定文と措定文を比較する前に、本節では措定文はどのようにテキストに出現し、その文における要素がどのように展開するかを説明する。3.1節で示したように、措定文は「Aについていえば、それはBという性質をもつ」という意味を表す。A項とB項は「属性の持ち主—属性」の関係をもち、A項は指示的名詞句（□で示す）、B項は非指示的名詞句の一種である叙述名詞句（波線で示す）である。措定文の多くは(18)と(19)のように出現する（108例中93例）。

(18) ついに僕のところにも来た……マラリアだ。/マラリアは、ハマダラカという蚊に刺されることでかかる感染症だ。西アフリカ一帯では、マラリアで亡くなる人が多い。恐ろしい病気だ。/その夜は悪寒が止まらず、骨から震えてしかたがなかった。治まったかと思うと今度は汗がだらだらと流れる。
（坂本達「恩返し井戸を掘る」東京書籍）

(19) 私が住んでいる東京でも、春になると、里山のような所にはカントウタンポポが咲いています。/日本はタンポポが多様な国です。平地から高山に至るまで、二十種類ほどの日本在来のタンポポが生えています。（1文略）世界のタンポポ研究者から見れば、多様なタンポポがそこかしこに生えている日本は、憧れの国でしょう。

（保谷彰彦「私のタンポポ研究」東京書籍）

(18)では、テキスト作成者がマラリアに感染した時にギニア人に色々助けられたという話に入る前に、マラリアはどのような病気かについて説明している。マラリアについて説明する際に措定文が用いられている。また、(19)でも日本という国について説明する際に措定文が用いられている。ただし、この場合の説明は日本とタンポポとの関係を表す属性を指し、後続文への展開に役立つ情報を与える説明である。一方、(18)は、読み手が特定の言葉の意味について理解していないと推定して説明を記述する場合である。(18)と(19)における措定文には説明内容に関する違いがあるが、いずれもA項における要素の背景的な情報を与え、その要素を後続文に持続させるために用いられる点が同様である。すなわち、措定文の場合、A項が後続文で語り継がれる。

しかし、B項が後続する場合も見られる。(19)のB項では「タンポポが多様な国」という名詞句が用いられ、その後日本ではタンポポがどのように多様なのかについて説明している。また、以下の(20)は手紙の効用に関するテキストの冒頭部である。この例の措定文のB項には「本当に不思議な様式」が出現

し、その後手紙がどのように不思議なのかという説明が後続する。このように B 項の要素に不明点がある場合、B 項が詳述の形で後続する。ただし、このような場合も A 項の話の範囲内で行われる説明であるため、A 項も B 項と共に後続する。

- (20) 手紙は本当に不思議な様式だ。口では言えないことだけでなく、書く前は思ってもみなかったことが言葉になって出てくる。思っていることを書くのではなく、書くことによって自分が何を思っていたのかを知らされる。どんなに時間をかけて書いた手紙でも出さないこともあるのはそのためだ。
(若松英輔「手紙の効用」東京書籍)

通常、A 項は既出の要素、あるいは、先行文脈から推論できる内容を表す要素である。この点を踏まえて考えると、措定文は先行文脈に出現した主題を持続させるための機能をもつといえる。しかし、(20)の A 項「手紙」のように、措定文として初めてテキストに導入され、主題として後続する要素もある。この場合の措定文は 3.3 節の(6)で示した「主題導入の用法をもつと判断する条件」に当てはまるため、主題導入の用法をもつといえる。主題導入として用いられる措定文は 7 例にすぎないが、その中の 5 例は(20)のように主題となる要素が指示的名詞句である A 項として出現する。つまり、談話主題は措定文における指示的名詞句として導入されることができ、叙述名詞句としては通常導入されない。よって、叙述名詞句は主題導入の機能を担わないといえる。

以上より、措定文の主な機能は既出の主題を持続させることだとわかった。この機能は述語が名詞句である措定文にとどまらず、属性叙述の性質をもつ動詞述語文にもこの機能をもつと予想している。砂川(2005)の調査では、属性叙述文の使用後に属性の持ち主が必ず後続するという結果が報告されており、「その人物を中心とした出来事を前景化して語るために必要な背景的な情報を与えるというのが属性叙述の役割 (p.189)」と指摘している⁷。この調査対象は人間を主に展開させる物語であるが、本研究では無情物の場合も同様の機能・役割が見られる。このため、措定文の機能は属性叙述の機能を反映すると考えられる。

⁷ 砂川(2005)は益岡(1987)の叙述類型の概念に基づいて分析している。属性叙述文とは「現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べる(益岡 1987: 21)」文を指す。

最後に、前節で述べた指定文の特徴②「値である要素の意味範疇は文の主題導入機能の有無に影響する」について説明する。前節の(17)として取り上げた値が数量である指定文は後続せず、先行文脈の要素が続いて後続すると述べた。これは本節で述べた措定文と共通している。数量のような要素は特定の要素の性質を表すと解釈できるため、措定文と同様の機能があると考えられる。つまり、値の意味範疇によって措定文に近くなったり、指定文・措定文の解釈が曖昧になったりする。このように中間的な場合は更なる検討が必要である。

7. コピュラ文における名詞句の指示性と主題展開機能との関連

5節～6節の分析で、指定文の主な機能は新たな主題を導入してそれを後続させること、措定文の主な機能は先行文脈に出現した主題を持続させることだとわかった。本節では、それぞれの文の機能には名詞句の指示性がどのように関連するかを分析し、指定文へ主題導入機能をもたらす原因を考察する。

措定文と指定文における名詞句は、以下のような指示性をもつ。□は指示的名詞句を、波線部は非指示的名詞句を示す。

(21) 措定文：指示的名詞句—非指示的名詞句

a. マラリアは、ハマダラカという蚊に刺されることのでかかる感染症だ。

指定文：非指示的名詞句—指示的名詞句⁸

b. その疑問を解決したのは、第二の技術革新である「天体力学」であった。

(21a)の措定文と(21b)の指定文は、6節の(18)と1節の(1)で取り上げた例であり、それぞれの文における「マラリア」と「天体力学」が後続する要素だと述べた。(21a)の「マラリア」が既出の要素、(21b)の「天体力学」が初出の要素だという異なる新規性をもつが、いずれも指示的名詞句である。つまり、措定文と指定文はいずれも指示的名詞句が主題として後続する。非指示的名詞句、特に叙述名詞句は談話の世界に指示対象 (discourse referent) を作らないと指摘されている (Kuno 1970)。変項名詞句は、(22)のように、「それ」のような指示語で指示対象を作る場合が観察された。しかし、「それ」の使用は先

⁸ 5.1.1節で示したように、B項には非指示的名詞句である変項名詞句が出現できる。しかし、この場合のB項はA項における変項名詞句より指示性が高いと思われるため、ここでは指示的名詞句として論じる。

行文における変項名詞句を該当文に持ち込むためであり、変項名詞句を主題として後続させるためではない。このように、非指示的名詞句は主題として後続しないのである。

(22) ところが、二十数年前に、フランスの南部で、これ以上の壁画が見つかった。ラスコー洞窟の壁画が、それである。 (12) 一部再掲

以上、基本的には指示的名詞句である要素が後続するのに対し、非指示的名詞句である要素が後続しないことを述べた。指定文では、新たに導入された要素が後続しやすい指示的名詞句であるため、この文は主題導入の働きをもつことになる。一方、措定文では既出の要素が指示的名詞句であるため、その既出の要素を持続させる働きをもつことになる。このように、文における名詞句の指示性が主題展開の仕方に影響するといえる。指定文が主題導入機能をもつことは、新たに導入された要素が指示的名詞句であることに起因すると考えられる。

8. まとめ

本研究では、主題導入機能をもつ指定文を、名詞句の指示性・非指示性という意味論的な観点で分析した。指定文には、世界に存在する対象・概念を指示するために用いられる「指示的名詞句」と、そうではない「非指示的名詞句」が用いられる。指定文における非指示的名詞句は「変項名詞句」という充足されていない変項 x をもつ名詞句である。そして、変項 x を埋めるための「値」は文中に出現し、基本的に指示的名詞句がその値となる。

指定文の多くは、変項名詞句が先行文脈から引き継いだ内容であり、その値が新たに導入される要素である。そして、値である要素が談話主題として後続する。主題導入として用いられる指定文は以下の特徴をもつことが明らかになった。

- ① 値である要素が変項名詞句より高い新規性を持たなければならない。
- ② 値である要素の意味範疇は文の主題導入機能の有無に影響する。

同じくコピュラ文にあたる措定文には、指示的名詞句と非指示的名詞句の一種である「叙述名詞句」が用いられる。措定文における主題展開の仕方を調べたところ、この文は既出である要素を主題として持続させる機能を担うことがわかった。また、措定文と指定文における主題展開の違いと名詞句の指示性の関連を分析した結果、これらに共通して指示的名詞句が主題として後続する傾

向が見られた。一方、指定文は措定文と異なり、指示的名詞句に新たな要素が出現する。このため、主題導入機能をもつことになると考えられる。

非指示的名詞句自体は主題として後続しないが、そのうちの変項名詞句は主題導入の用法をもつ文に使用されることがある。このことから、変項名詞句は主題導入機能と何らかの関係があると予想される。今後は変項名詞句と主題導入との関わりについて検討する。

調査資料

『光村ライブラリー・中学校編 第四巻 フンダカバチの秘密 ほか』（光村図書出版, 2005）／『新しい国語 1』～『新しい国語 3』（東京書籍, 2020）／『中学生の国語 一年』～『中学生の国語 三年』（三省堂, 2011）

参考文献

- 伊藤晃（2010）『談話と構文』大学教育出版。
- 加藤雅啓（2009）「ガ分裂文の談話機能」『上越教育大学研究紀要』第28巻, pp.199-130.
- 上林洋二（1988）「指定文と措定文 一ハとガの一面一」『筑波大学文藝言語研究・言語篇』14, pp.57-74.
- 熊本千明（2000）「指定文と提示文一日・英語の観察から」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』5（1）, pp.81-107.
- 栗原さよ子（2007）「文章におけるコピュラ文の機能—「おすすめなのはワインです」と「おすすめなのがワインです」—」『学習院大学大学院日本語日本文学』第3号, pp.61-41.
- 砂川有里子（1995a）「語順と特立提示機能に関する試論—新規項目の導入形式を手がかりとして—」『第4回小出記念日本語教育研究会論文集』, pp.99-112.
- 砂川有里子（1995b）「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄編『複文の研究（下）』, pp.353-388, くろしお出版.
- 砂川有里子（2005）『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』くろしお出版.
- ニアムチャラーン・ニーラチャー（2021）「主題性の観点からみた新規要素の導入形式—テキストにおける重要な要素を対象に—」『国語学研究』60, pp.58-70.
- ニアムチャラーン・ニーラチャー（2023）「存在文における名詞句の指示性と主題導入機能」『日本語文法』23（1）, pp.155-171, くろしお出版.
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.
- 西山佑司（2007）「名詞句の意味機能について」『日本語文法』7（2）, pp.3-19, くろしお

出版.

益岡隆志 (1987) 『命題の文法 一日本語文法序説一』 くろしお出版.

三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院.

峯島宏次 (2013) 「第 14 章 変項名詞句の階層」 西山佑司編 『名詞句の世界 一その意味と解釈の神秘に迫る一』 ひつじ書房.

Brown, G., & Yule, G. (1983) *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Du Bois, J.W. (2003) Argument structure: Grammar in use. In J. W. Du Bois, L. E. Kumpf, & W. J. Ashby (Eds.), *Preferred argument structure: Grammar as architecture for function*, pp. 11-60. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Givón, T. (1983) Topic continuity in discourse: An introduction. In T. Givón (Eds.), *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study*, pp.3-41. Amsterdam: John Benjamins.

Kuno, S. (1970) Some Properties of Non-referential Noun Phrases. In R. Jakobson, & S. Kawamoto (Eds.), *Studies in General and Oriental Linguistics*, pp.348-373. Tokyo: TEC.

Todd, R. W. (2016) *Discourse Topics*. Amsterdam: John Benjamins.

Van Dijk, T. A. (1977) Sentence Topic and Discourse Topic. *Papers in Slavic Philology 1*, pp.49-61.